□サブタイトルコール

達也　「第四話　焼きそばパン、販売開始・後編」

○ルーフェウス学院・購買部
シーンの切り替わりと昼休みであることを表現するために、鐘を鳴らす。

達也ナレ　「大図書館での調査・午前の部を終えた俺は、ルーフェウス学院に来ていた。身内特権で焼きそばパンを用意してもらってもよかったんだが、初日がどうなってるかが気になってたしな。
で、購買は……まさか、あの人垣か？」

※ルーフェウス学院は、屋内の床には古代の技術で作られたコンクリート。
足音は普通にコンクリートで。
また、基本的に全編通してオクトガルのセリフがバックで聞こえる感じで。
なお、パンの購入代金の受け取りはオクトガルが担当です。

オクトガル１「チープでジャンク～」
オクトガル２「習慣性ばっちり～」
オクトガル３「コーラとセットで美味しさ二ば～い」
オクトガル４「主食に主食～」
オクトガル５「炭水化物に炭水化物～」
オクトガル１「カロリー危け～ん」
オクトガル全員「禁断の味～」

オクトガル２「並んで～、並んで～」
オクトガル３「男の子はこっち～」
オクトガル４「女の子はこっち～」
オクトガル５「売り子さんには手を触れないで～」
オクトガル１「宏ちゃんピンチ～」
オクトガル２「アツアツのピザトーストもあるの～」
オクトガル３「袋を開けたら～」
オクトガル４「焼き立てアツアツ～」
オクトガル全員「全部ひとつ十チロル～」（十チロル＝だいたい百円です）
オクトガル５「買って買って～」

オクトガル１「毎日買って～」
オクトガル２「おやつに～、主食に～」
オクトガル全員「たくさん買って～」

購買の前には販売用の特設カウンターがあり、そのカウンターを囲むように数十人の学生・教員がいる。
達也と真琴、購買の前でばったり会う。

真琴　「あら、達也じゃない」
達也　「結局、同じ時間になったか」
真琴　「まあねえ。昼休みだしね。ってか、予想外にすごい人だけど……」
達也　「多分だが、うちの連中とかオクトガルとかがこの購買のことを宣伝して回ったんだろうな」
真琴　「あ～……、うん。あたしの見通しが甘かったわ」
エイラ　「こうなっちゃったら、おとなしく並んで待つしかないとして、マコト、その人誰？」
真琴　「えっと、こっちの色男は香月達也。あたしと同じくアズマ工房所属の知られざる大陸からの客人。達也、この子はエイラ。あたしのクラスメイトで同好の士」
達也　「よろしく。っと、やっとカウンターが見えてきたが……」
真琴　「ほんと、すごい行列ね……」
達也　「まあ、しゃあねえ、いくか」

シーンチェンジ

宏　「本日遂に発売開始の、焼きそばパン！　食ったら病みつき、焼きそばパン！　一個十チロルやで～！」
（大体材料費で四～五チロルぐらいになるため、十チロルです）

宏は、カウンターの一番奥に設置したお立ち台の上で宣伝。
一番先頭の客とは２～３メートル離れている。オクトガルは宏の頭上を飛び回っている。
宏やオクトガル達と最後尾の達也達との間はおおよそ８～１０メートルぐらいの距離。

オクトガル３「チープでジャンク～」
オクトガル４「習慣性ばっちり～」
オクトガル５「コーラとセットで美味しさ二ば～い」
学生男「やっぱ焼きそばパン、うまそう！
　　このコーラってやつと合わせると、ヤバそう！」
オクトガル１「主食に主食～」
オクトガル２「炭水化物に炭水化物～」
オクトガル３「カロリー危け～ん」
オクトガル全員「禁断の味～」
真琴　「ねえ、達也……」
達也　「ああ、俺もヒロの恐怖症を見落としてたわ……」
真琴　「てか、わざわざあんなカウンターの奥にお立ち台作ってまで、無理して呼び込みとかしなくてもいいのに……」
達也　「まったくだ……」

達也ナレ「今まで女性恐怖症が原因で、
　ファーレーンでのカレーパン屋台とかでもまともに売り子なんてできなかったヒロが、パンの売り子やるって話をしてた時に、
　何で誰もそのことに気が付かなかったのか……」

宏　「焼きそばパンが不満なそこのあなた！ そう、自分や自分！
　焼きそばのビジュアルが引くっちゅうあなたには、
　魅惑の甘みのクリームパンがお勧めや！」
オクトガル４「並んで～、並んで～」
オクトガル５「男の子はこっち～」
オクトガル１「女の子はこっち～」
オクトガル２「売り子さんには手を触れないで～」
オクトガル３「宏ちゃんピンチ～」
真琴　「なるほど。ああやって整列させて、宏から少しでも女体を遠ざけてるわけか……」
達也　「つうか、ちゃんと見たらものすごい鳥肌だぞ……」
真琴　「よく見なきゃわかんないけど、顔色も結構やばいわよね……」
達也　「ヒロ、本気で無茶しやがって……」
宏　「サ、サンドイッチ類も充実しとるで～」
オクトガル４「アツアツのピザトーストもあるの～」
オクトガル５「袋を開けたら～」

オクトガル１「焼き立てアツアツ～」
オクトガル全員「全部ひとつ十チロル～」
オクトガル２「買って買って～」
オクトガル３「毎日買って～」
オクトガル４「おやつに～、主食に～」
オクトガル全員「たくさん買って～」
達也　「なんつうかこう、あいつらの宣伝の仕方、まるで洗脳音波みたいだな……」
真琴　「あたしの宣伝とか、必要あったのかしら……」

真琴の台詞に合わせて、足音が近づいてくる。

ケイ　「あら。私はマコトから聞いてなきゃ、わざわざ買いに来てないわよ？」
真琴　「ケイじゃない。あんた、並んでたの？」
ケイ　「ええ。正直、聞いてなかったら並ぼうとも思わないわよ。さすがにこの混雑は引くわ……」

達也ナレ「この女、引くわとか言いながら
しっかり自分の分を確保してやがる……」

宏　「昼飯に焼きそばパン！　フィールドワークに焼きそばパン！
小腹がすいたら焼きそばパン！　運動部と成長期の強い味方、焼きそばパンは残り七十個やで～！」
オクトガル５「クリームパン、あと八十個～」
オクトガル１「サンドイッチ各種八十個～」
オクトガル２「ピザトースト七十五個～」
宏　「やで～～～」

達也　「って、いつの間にか、残りカウントが百を切ってんぞ！」
真琴　「ちょっとちょっと！　いくら何でも売れるの早すぎるわよ！」
達也　「やべえ！　急いで買うぞ！」
真琴　「ええ！　ケイの紹介は後回しで！」
達也　「ついでに、買ったらとっととヒロを回収するぞ！」
真琴　「了解！」

ざわめきに突っ込んでいく達也と真琴。

【第四話・終了】